

**目的** 昨年度の本研究第1報、第2報、第3報に続き、江戸時代中、後期の家相の文献を通して当時の住まいのあり方や、住まいの作られ方、捉えられ方を探る。本年度はその中でも特に「家相図解」上・下巻に見られる住まいと方位の關係を通して、方位に関する思想がどの程度住まい作りに関わっていたのかについて知ることとする。

**方法** 東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の江戸時代の住まいに関する文献のうち、「家相図解」上・下巻 松浦東鷄(久信)著 寛政10年(1798)刊 を取上げてその中の、吉凶の判断が方位によって左右される項目(地相・門戸・街道と住居の關係・家造り土藏・井戸雪隠・池泉水手水鉢・神棚・仏壇・竈・鬼門隅)についてそれぞれ検討する。

**結果** 家相における吉凶の判断の基準はここで取上げた方位のほかには、数や時間軸(暦、年回りや季節、月、曜日など)によるものもあるが、これらはたいの場合方位による判断に加えて論じられている。これを見ても「家相図解」では家相の判断が方位の影響を多大に受けて論じられていることがわかる。この場合の方位とは東西南北の360度を8等分し、その震・巽・離(東・南東・南)などの各方位をさらにそれぞれ3等分して甲・卯・乙・辰・巽・巳・丙・午・丁などと名付けた二十四山方位によって分割したものである。これに十干・十二支の考え方も加えて扱っている。これらは共に古代中国の思想体系からの準用であり、住まいの作り方や住まい方を論じているこの文献の内容に、多大な影響を与えていることが分析の結果明らかになった。方位思想を、分りやすく、身近な住まいをテーマに論じているのが家相の書であるといえないだろうか。